

ひょうご 水百景

No.7 千種川（赤穂市）

～日本三大上水道の一つ「赤穂藩上水道」～



写真-1 宝珠山から千種川を撮影（平成27年8月）

■ 宝珠山から千種川および JR 赤穂線、木津井堰、山陽自動車道を望む

上の写真-1 は、赤穂藩上水道の取水口の一つだった木津井堰を撮ったものです。この写真は、撮影ポイントを探すのに苦労しました。現地を下見して、空中写真で当たりをつけて赤穂市坂越へ。坂越の大避神社の参道を通り妙見寺、さらに妙見寺奥の院を抜けると左手に茶臼山山頂の関西電力の鉄塔が見えますが、右手に見える宝珠山に向かって尾根筋を少し進むと灌木の隙間から千種川が見える場所があります。イヤー、期待していた以上の眺めでした。

■ 今も残る「息継ぎ井戸」

元禄 14（1701）年 3 月 14 日、播州赤穂藩主・浅野内匠頭長矩（たぐみのかみながのり）が、高家旗本・吉良上野介義央（こうすけのすけよしむさ）に対し江戸城殿中において刃傷（にんじょう）に及びます。内匠頭は殿中抜刀の罪で即日切腹、赤穂藩は改易（武士の身分を剥奪して所領と城・屋敷を没収すること）となりました。

ご存じ「赤穂義士」の発端となった事件です。このお家の一大事を知らせるため、赤穂藩士の早水藤左衛門と萱野（かやの）三平が3月14日夕刻に早かごで江戸を出発し、19日早朝赤穂に到着、二人は井戸の水を飲んで一息ついてから城内の大石内蔵助邸に入ったと伝えられています。その「息継ぎ井戸」が今も残っています（写真-2）。



写真-2 息継ぎ井戸

実はこの井戸、地下水を集めた井戸ではなく、赤穂市高雄付近の千種川から取水し、導水路を延々と流れてきた赤穂藩上水道の汲出枡なのです。

■ 日本三大上水道のひとつ～「赤穂藩上水道」

赤穂藩の城下に張りめぐらされた上水道は元和 2（1616）年に完成し、城内や城下に住む侍や町人たち全員の家一戸ずつに給水されていました。（侍屋敷から町家に至るまで各戸に給水……ここがすごい!!）

この「赤穂藩上水道」は、江戸の神田上水、広島福山上水と並んで「日本三大上水道」と呼ばれています。

因みに福山上水も、福山城下が芦田川河口部にあつて、井戸を掘ると塩水が湧き出たため元和 8（1622）年に上水道を整備しています。

慶長 5（1600）年の関ヶ原の戦いに勝利し天下の覇権を握った徳川家康は、親藩・譜代・外様の各大名を再配置するなかで、西国の押さえとして池田輝政を播磨国に配します。姫路藩の初代藩主となった輝政は、本拠である姫路城のほか、国内に 6 つの支城を置いて領国を固めます。そのうちのひとつが赤穂城であり、一族もしくは家老クラスの重臣を置き西国への防備とします。

赤穂には末弟である池田長政が配されましたが、慶長 8（1603）年、二男忠継に備前国が与えられたため、西への防備は備前国に任せられることになり、赤穂には代官として垂水半左衛門勝重が置かれました。半左衛門は、加里屋の地に「搔上（かきあげ）城」を築き、生活用水を確保するなど、城下町の基盤を整備することに。

しかし、城下一帯は元々干潟や干拓地だったので、井戸を掘っても塩水が湧き出してしまうため生活用水を確保することが困難でした。半左衛門は、3 年がかりで 100m 近い隧道を掘り 7km に及ぶ導水路を築いて周世川（現・千種川）から水を引き、元和 2（1616）年に上水道を整備しました。

赤穂藩上水道は、その後、浅野藩の時代（1645～1701 年）に形を整え、森藩に受け継がれ、さらに明治・大正・昭和初期と 320 年もの永きにわたり赤穂の人々の生活を支えてきましたが、昭和 19（1944）年に近代的な水道施設が整備されると同時にその役目を終えました。

■ 千種川からの取水地点は根木

赤穂藩上水道の当初の取水地点は、千種川を約 7km 遡った高雄の根木付近で、ちょうど千種川が西山にぶつかって流路を大きく北東方向に変えるところ（図-1 参照）です。

ここで取水した水を導水路（開渠）に引くために、長さ 52 間（≒95m）のトンネル「切山隧道」を掘っています。工事は、慶長 19（1614）年に開始され、元和 2（1616）年に完成しています。

今も残っている「切山隧道」について、呑口部にある説明板（写真 3 参照）には下記のように記されています。



写真-3 切山隧道呑口部

切山隧道

「水道ハ池田家ヨリ始マル 垂水半左衛門 根木村ノ山ヲ切抜キ 周世川ノ水ヲ導テ 仮屋二通ス」

享保 12（1727）年藤江忠廉著『播州赤穂郡志』より

江戸時代、千種川下流域にあった赤穂城とその城下町では、井戸を掘削しても海水が湧き出たため、飲料用水（上水）の確保が切望されていた。赤穂郡代であった垂水半左衛門勝重は、慶長 19（1614）年から「西山」の隧道掘削を開始し、城下より約 7km 離れたこの地から、専用の導水路を築いて城下周辺の上水を確保した。元和 2（1616）年に完成したこの隧道は、長さ 52 間（約 95m）にもわたるもので「切山隧道」と呼ばれている。

この場所は、千種川の流が西山にあたって大きく流路方向を変更する個所にあたる。周囲は淵となって水量が安定し、かつ水位がかなり高かったために、この地点が選ばれたと考えられている。

しかしながら、正保 2（1645）年に浅野家が入封してしばらくすると、取水口は高雄の船渡へ、次に木津へと変更されたため、この隧道は農業用水路として使用されることとなった。

明治時代には隧道の拡張工事が行われ、昭和 38（1963）年には赤穂地域水利改良事業で、隧道の出入口がコンクリート擁壁によって覆われるなどしたが、内部は現在も往時の姿を留め、灌漑用及び排水用の水路として 390 年以上もの歴史を誇っている。

なお、昭和 58（1983）年には、この南側に真殿地区排水・用水路として高雄川壅（こん）道が新設された。

（赤穂市・赤穂市教育委員会）

■ 用水需要の増大に伴い取水地点を変更する

この取水地点は、浅野藩初代藩主・長直の時代に高雄の船渡に変更され、元禄 15 (1702) 年には木津へと変更されています。理由は、千種川の流路が変わったことと、塩屋・戸嶋新田の開発に伴い用水需要が増加したためと言われています。

船渡では、石で井堰を築いて水位を上げ、堤防下に伏せ樋を設けて取水したそうです。また、木津の取水口は、永禄年間 (1558~1570 年) にすでに農業用水用として存在していたものを、元禄 15 (1702) 年に上水道用の取水口として再整備したものだそうです。

■ 延々と続く専用の導水路

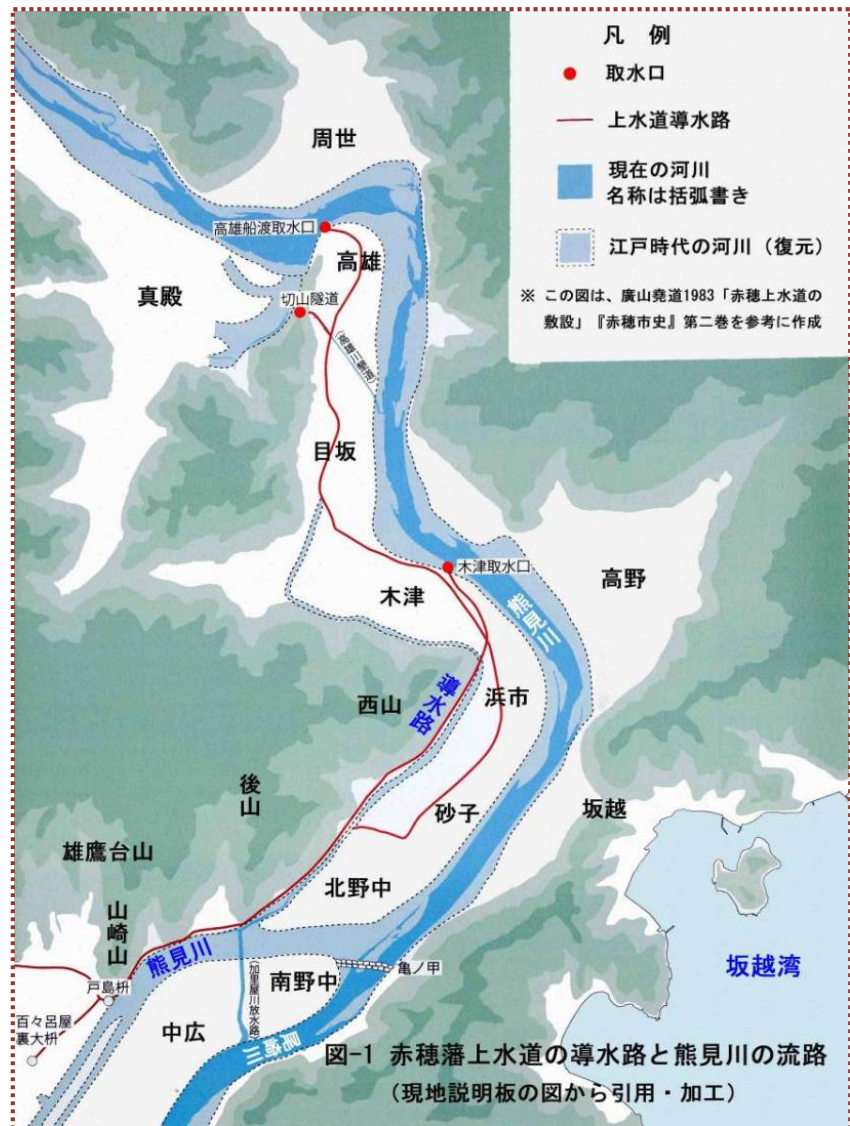
切山隧道を通った水は、浜市の西山突端までは千種川の旧流路を利用し、そこから下流は雄鷹台山・山崎山の麓を掘削してつくった導水路によって、山崎山突端に設置された「戸嶋枡」まで送られます。

水質を保全するために、農業用水と明確に区別され、導水路の周りに牛や馬を通らせないようにとの御触れが出され、悪水の流入防止や余水放流の設備も設けられていました。

また、常時巡回する水道番人も置かれ、水質の保全にはかなりの配慮がなされていたそうです。



写真-4 山裾を通る導水路



■ 戸嶋枡で土砂を沈殿させる

導水路を流れてきた水は戸嶋枡で分岐され、南へは城下町の上水道として送られ、西へは浅野藩初代藩主・浅野長直公が力を注いだ塩屋・戸嶋新田の農業用水 (戸嶋用水) として送られていました。この戸嶋用水は、播州赤穂駅北の山裾に沿って流れて、塩屋川の上流部に接続されています。

戸嶋枡は、導水路を流れてきた水を浄化する機能も併せ持っていて、堰で土砂を沈殿させ、上澄みの水が約 600m 下流の「百々呂屋裏大枡 (もちろやうらおおます)」というろ過施設へ送られていました。



写真-5 戸嶋枡

■ 百々呂屋裏大柁でろ過して各戸へ給水

「百々呂屋裏大柁」は、城下の入り口部に設けられた2間(≒3.6m)四方の石組柁のろ過施設で、竹簧(たけす)により塵芥を除去しています。明治中期には、ここに礫と木炭による浄化設備がつけられていたといわれています。

また、ここでは城下に送られる水量の最終調節が行われ、余水は熊見川(現・加里屋川)へ放流されていました。今も常清寺の南を加里屋川へ流れる溝が残っています。

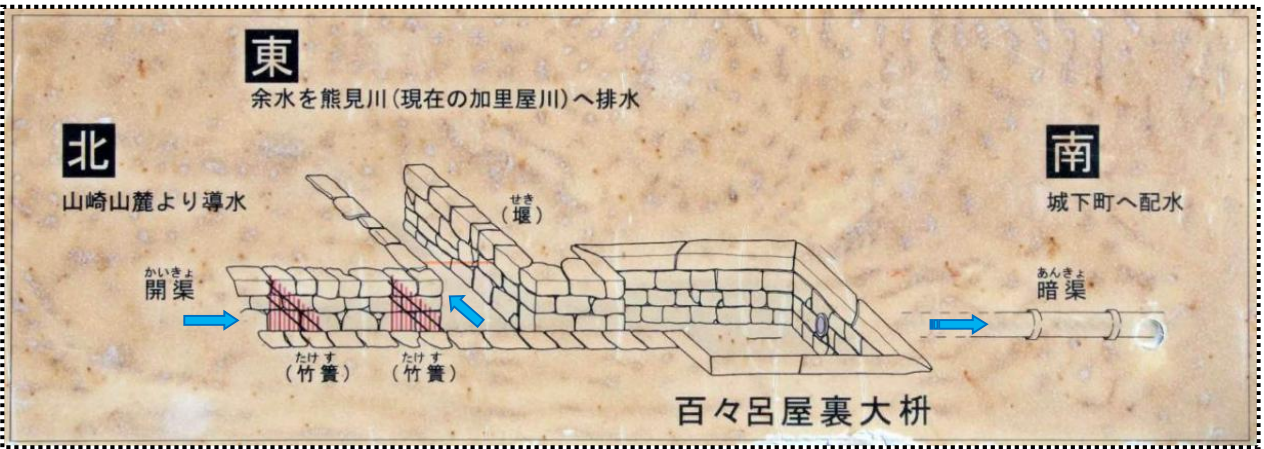


写真-6 百々呂屋裏大柁の説明石板

■ 赤穂藩上水道のすごいところは「各戸給水」

「百々呂屋裏大柁」を通った水は、道の下を通る配水樋に送られます。城下の各戸への給水は、配水樋から引き込まれた給水樋によって屋敷内の汲出柁に送られ、そこで長柄の桶やつるべを用いて汲み上げていたそうです。汲出柁は、底に瓶を埋め、その上に土管をいくつか積み重ねたものでした。

一方、城内に送られる水は大手門まで行き、そこにある大手橋東口柁からサイフォンにより三の丸外堀の底をくぐり、大手門内の柁に吹き上げさせ、城内御用水として赤穂城本丸の藩邸に配水されていました。上級武士の邸宅では、産地に近いこともあって備前焼の給水樋が使われていたそうです。

また、本丸御殿では、余水を池に流し、非常時のための貯水池(写真-8)にしていたといわれています。

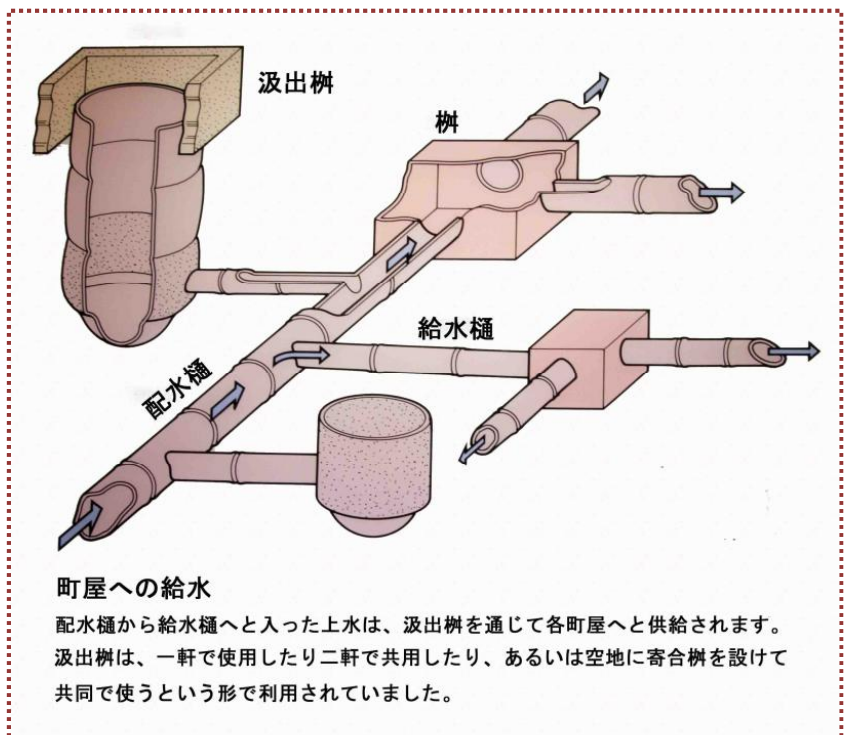


図-3 町屋への給水(赤穂歴史博物館展示パネルから引用・加工)



写真-8 赤穂城・本丸庭園の池



写真-9 赤穂城内の旧水道石大柁



写真-10 赤穂城内の旧水道角柁

■ 赤穂藩上水道の遺構を保存

昭和 50 年代になって、下水道工事が旧城下町内で進む中、「この上水道遺構を保存すべし」という世論が沸き起こりました。神戸大学工学部による発掘調査が行われ、一部のルートは保存されています。

また、駅前通りや大手門前には「赤穂藩上水道モニュメント」があり、ほかにも各所に「赤穂藩上水道」の説明板が設置されていて、遠く江戸時代の初期から赤穂の城下町を潤してきた上水道の歴史を知ることができます。

また、平成元（1989）年に開館した赤穂市立歴史博物館では、「旧赤穂上水道」（赤穂藩上水道）が展示テーマの一つとなっていて、発掘調査で掘り起こされた瓦質土管や素焼き土管、備前焼の土管、素焼きの瓶杓、竹樋、汲出柵の上枠などが展示されています。



写真-7 駅前通りに設置された『赤穂藩上水道モニュメント』

■ 「塩」に泣き「塩」で笑う

井戸を掘っても塩水が湧き出れば、生活用水として使うことができません。そのため、赤穂藩では、100m 近いトンネルを掘り、7km もの長い導水路を築き、そして城下の地下に網の目のように配水管を敷設して各戸給水の上下水道施設を整備しました。

江戸時代の初め、人力が中心の頃に数々の苦難を乗り越えて赤穂藩上水道をはじめとする基盤が整備された赤穂の町は、浅野家の時代（1645～1701 年）になって、入浜式塩田の開拓と塩を重視した経済政策の実施により藩は繁栄していきます。



写真-11 流下式塩田（赤穂海浜公園）

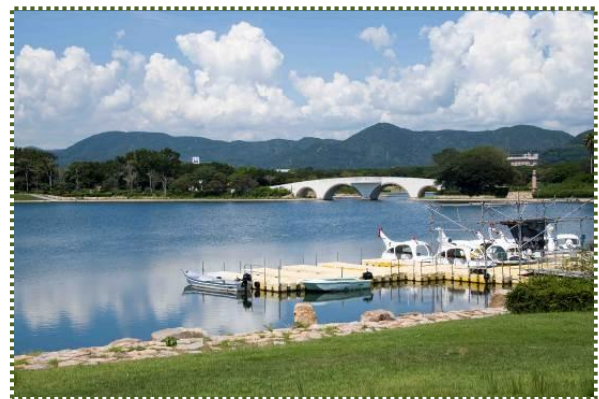


写真-12 赤穂海浜公園

「塩」に泣き、「塩」で笑った赤穂のまち。「塩水」が湧き出たため生活用水の確保に苦闘しましたが、上水道の整備によってこれを乗り越え、そして今度は「製塩」により藩の繁栄につなげていったのです。

この入浜式塩田は、昭和 30（1955）年頃を中心に労働力が少なくてすむ流下式塩田に転換され、さらに昭和 47（1972）年には塩田という広大な面積を必要としないイオン交換樹脂膜法に転換して現在に至っています。

不要となった塩田跡の一部には、昭和 62（1987）年 7 月 25 日、地域の自然環境や赤穂の歴史的背景を生かした県立都市公園「赤穂海浜公園」（総面積=71.7ha）が開園しています。

■ モノローグ

元禄 15 年 12 月 14 日（1703 年 1 月 30 日）深夜、大石内蔵助以下赤穂浪士 47 名が吉良邸に討ち入り、見事本懐を遂げました。以来、「赤穂義士」は全国的に有名になり、毎年 12 月 14 日に行われる「赤穂義士祭」（令和 7 年で 122 回目）には大勢の観光客が訪れます。これに加えて「赤穂の塩」、さらには、代々の赤穂藩主が将軍家に献上していた和菓子「塩味まんじゅう」が有名ですが、赤穂には「赤穂藩上水道」というすばらしい遺産もあります。江戸時代初期につくられた水道施設は、近代水道施設の完成によりその役目を終えましたが、先人が確保した水道水源は近代水道に引き継がれ、今も赤穂市民の生活を支えています。

因みに赤穂市の水道料金は、平成 20（2008）年全国安値ランキングで第 1 位にランクされ、平成 30（2018）年の全国安値ランキングでも第 1 位にランクインしています。（1 ヶ月に 20 トン使用時＝829 円、メーター代込み）

改めて、水の確保に苦勞された先人に感謝！！

【参考資料】

- 1 『文化財をたずねて No.4 『旧赤穂上水道』の史跡めぐり』 赤穂市教育委員会生涯学習課文化財係 平成 7 年 3 月
- 2 『赤穂市史・第 2 巻』 赤穂市史編さん専門委員・八木哲浩 昭和 58 年 3 月
- 3 『兵庫県赤穂市の文化財～赤穂城下町跡発掘調査（2003-3-4-5 区）現地説明会資料』 赤穂市教育委員会事務局文化財課文化財係
<http://www.ako-hyg.ed.jp/bunkazai/excavation/jokamachi2003-3.html>
- 4 『文化財をたずねて No.4 特別編集～旧赤穂上水道をたずねて』 赤穂市教育委員会 平成 28 年 3 月
- 5 『全国水道料金ランキング』 「水と暮らす」HP https://waterserver-mizu.com/interview/suidou_ranking
- 6 『福山上水』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 23（2011）年 12 月 『ひょうご水百景』 No.7

改訂：令和 8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.7